

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012年11月27日（火）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：平安時代初期物語文学におけるアジア叙述

——『竹取物語』と『宇津保物語』を中心に——

報告者：頼 振南（台湾輔仁大学外語学院日文系教授）



周知のように、古代日本は遣隋使、遣唐使、遣渤海使、渤海使を通じて中国大陸から大量の文化を受容した。朝鮮半島の百済からも漢字・儒教・仏教・医・易・暦などの文化が伝来し、五経博士、易・暦・医博士も渡来している。正式な使節団を派遣するほか、貿易船を通じてさまざまな文物が交易されたと思われる。日本の平安時代初期の物語文学『竹取物語』における「火鼠の皮衣」難題譚に出てくる「唐人船」はその一例である。さらに『竹取物語』における五つの難題譚を検証してみれば、「唐人船」のほかに天竺の「仏の石の鉢」、「東の海の蓬萊といふ山」、「龍の頸に五色に光る珠」と「燕の持たる子安の貝」などのものが示され、中国大陸以外、特にインドに存在しそうなものが記載されている。これらの記載を見ると『竹取物語』のかぐや姫は、中国とインドを中心とする、世界中から求婚の宝物を求めているかのようである。こうした『竹取物語』の作者の知識的な背景には、古代日本に伝来した外来文化が中国文化を中心に受容されていた事実があると考えて間違いはない筈であるが、それと同時に中国周辺の文化も一緒に受容されていたとも言える。要するに、インド文明と中国漢字圏文化に包括されるアジアの文化痕跡を、古代日本において確認することができるわけである。今回の発表では、学問的素養と知的好奇心に恵まれた男性作家によって創作された平安時代初期の物語文学に視点を据え、物語文学の中で「アジ

ア」が如何に叙述されているかを考察した。特に『竹取物語』における五つの難題譚と『宇津保物語』における秘琴伝説を取り上げて検討した。

(文責：頼 振南, 蔡 毅)

本講演の主な内容は、特別寄稿論文“平安時代初期物語文学におけるアジア叙述——『竹取物語』と『宇津保物語』を中心に——”として、本書 pp.1-21 に掲載されています。